イスラーム世界研究　第4巻1–2号（2011年3月）347–369頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 4-1&2 (March 2011), pp.347–369

曖昧なナショナリズムが生んだイラク政治の「分極化」
――2010年3月7日イラク国政選挙の分析――

山尾　大*

I. はじめに――「インティファーダ」以降の安定のなかで

シャルク・アウサト紙は、2009年のイラク情勢の分析を「マーリキー・インティファーダ（蜂起）」という言葉で締めくくった［*SA* 30 Dec. 2009］。2009年1月の地方選挙で、ヌーリー・マーリキー首相（ダアワ党党首）率いる法治国家同盟が大勝し、その後の1年間でマーリキー首相はイラク国内に強い基盤を形成した。すなわち、首相府の権限を次第に拡大し、強い指導者として戦後イラクに新風を巻き起こしたことが「インティファーダ」だった、というわけである。同時に、地方選挙を契機に、戦後イラク政治は、ナショナリズムと国民統合を強化する方向に舵を切ることとなった［山尾2009］。こうして、マーリキー政権の後半には、強い指導者と中央集権的政府が形成され、治安や汚職などの問題を抱えつつも、政治の安定的な運営が実現しはじめていた。

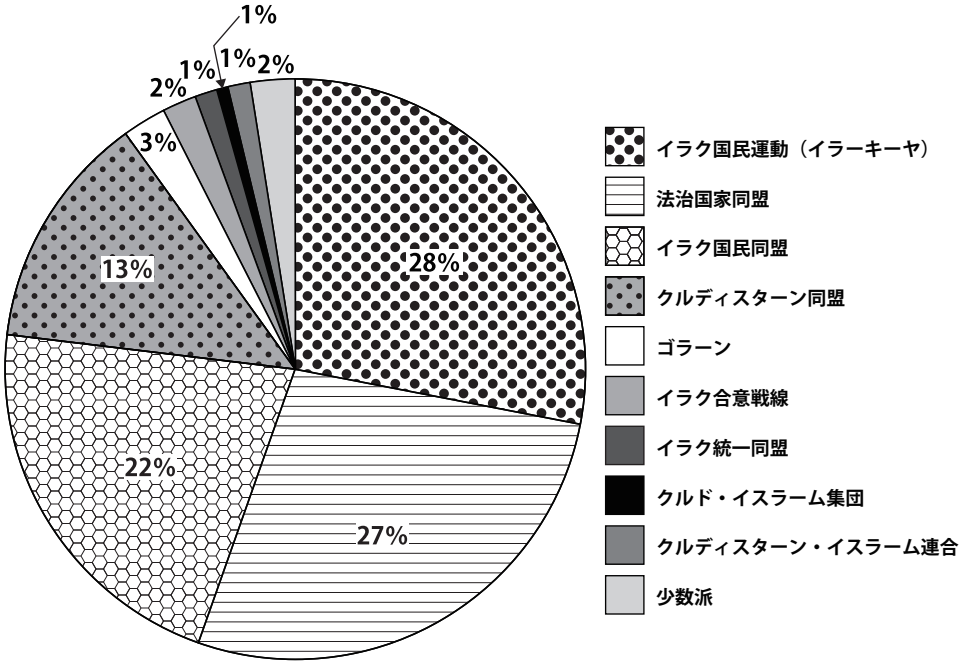
こうした政治状況のなかで、2010年3月7日に戦後3度目となる国会選挙が実施された[1)]。今回の選挙は、戦後初の正式な政府であるマーリキー政権の4年間の評価を問う選挙となった。同時に、2010年8月末の駐留米軍の半減（戦闘部隊の撤退）、2011年末の米軍完全撤退と、その後の自律的なイラク政権の形成を左右するという意味も持っていた。だが、これまでの選挙と同様、今回の選挙も、選挙法の制定、開票結果の発表、組閣の3段階で大幅に遅れた。その背景には、様々な利害対立があった。

「宗派の軸に沿った動員と宗派別の投票行動に特徴づけられる国家のパイの争奪戦」であった2005年の2回の国会選挙、「イラク・ナショナリズムに基づく中央集権型政府の形成と、連邦制に基づく（シーア派イスラーム主義）地域政府の形成を目指す政策対立」であった2009年1月の地方選挙と比較すると、今回の2010年3月の国会選挙はいかなる特徴を持っているのだろうか。

簡単に言えば、今回の選挙は、戦後初の世俗派の躍進と「分極化」（あるいは票の分散）という結果に終わった。具体的には、イヤード・アッラーウィー率いる「イラク国民運動」（以下、イラーキーヤ）が91議席を獲得して第1党に、マーリキー首相のダアワ党率いる「法治国家同盟」が89議席で第2党、イラク・イスラーム最高評議会（以下, ISCI）とサドル派を中心とする「イラク国民同盟」が70議席を獲得して第3党、「クルド同盟」が43議席で第4党となった。以上の4党だけで総議席の9割を占めるものの、いずれも過半数を獲得できず、イラク政治の分極化が進行したのである（図表1を参照）。

*　九州大学大学院比較社会文化研究院講師
1)　イラク戦争後の国会選挙は、第1回目の制憲議会選挙（2005年1月）、第2回目の国会選挙（2005年12月）の2回実施されており、今回の選挙は3回目となった。3月4日に軍人、治安・警察関係者、囚人、病人による特別投票（有権者約95万人）があり、5～6日に16カ国で在外投票（約140万人）が行われた。7日の本投票の有権者は約2,000万人。

【図表 1：各政党連合の議席占有率



（出所）イラク独立選挙管理員会ホームページ（http://www.ihec.iq/Arabic/default.aspx）をもとに筆者作成。

本稿は、3 月 7 日のイラク国政選挙で、以上で概観したような分極化という結果が出たのはなぜかという問題を、政党連合の形成をめぐる選挙前哨戦から結果の開票までの一連の流れを概観し、特徴と論点を抽出・分析することで明らかにする。

具体的には、第 II 節で、はじめに選挙制度の特徴と、その制度改正の過程の競合を概観し、次にその修正制度のもとで行われた政党連合の再編のプロセスと特徴、争点を概観する。続く第 III 節で、選挙結果とその特徴、および分極化という結果となった原因を分析する。最後に第 IV 節では、選挙戦の論点を整理したうえで、今回の選挙はいかなる特徴・意味を持っているのかを分析する。なお、本稿執筆段階で進行中の新政権の組閣にかんしては、稿を改めることとする。

II. 制度の変化と政党連合の再編――分裂した「与党」、統合した「野党」

本節では、はじめに選挙制度を概観し、次に主要政党連合の形成とその特徴、争点を俯瞰する。以上を通して、今回の国会選挙では制度が大きく変化したこと、政権「与党」が分裂し、反対に世俗主義勢力を中心とする「野党」が統合したこと、政党が宗派横断的な連合へと大きく再編されたこと、そして、脱バアス党政策をめぐる争点が露呈したことを明らかにする。

1. 制度の改正をめぐるポリティクス

はじめに、選挙制度を簡単にみておきたい。今回の選挙では、選挙法が改正されたが、重要な変化は以下の 2 点である。

第1に、非拘束名簿制比例代表（全国18選挙区〔県に当たる行政区分〕）が導入されたことである（2005年法律第16号修正選挙法〔以下，選挙法〕第3条1項）。2005年12月の国会選挙では、政党連合のみに投票する拘束名簿制が採用されたが、今回導入された非拘束名簿制のもとでは、有権者は政党連合と立候補者の双方に投票する。そして、各政党連合は、開票後、得票率に応じて選挙区ごとに議席が配分される。各政党連合は、配分された議席数だけ、得票数の多い立候補者から当選させる（選挙法第3条1～3項）、という仕組みである。

だが、各政党の指導部は、非拘束名簿制の導入に対して、本音では消極的であった。党幹部にとっては、出馬者リストの順位を独自に決定できる拘束名簿制が望ましい。というのも、初めて非拘束名簿制が導入された2009年地方選挙で、多くの党幹部が落選したことで、当落者の予想がつきづらい制度だということが判明したからである。さらに、非拘束名簿制のもとでは、党幹部がリストの順位を決定できないために、党議拘束も強化しづらい。したがって、ほとんどの政党が、拘束名簿制の復活を求めて交渉をまとめようとしていた[2)]。

にもかかわらず、非拘束名簿制が導入されたのは、シーア派宗教界から圧力がかかったためである。国会で拘束名簿制の採用が決まりかけたとき、ナジャフの最高権威アリー・スィースターニーは、「拘束名簿制で実施されるならば、宗教界とその最高権威は、国民に投票を呼び掛けることはない」と明言し、非拘束名簿制を強く支持するファトワーを出した［*al-Zamān* 6 Oct. 2009］。出馬者個人にも投票できる非拘束名簿制はより民主的である、というわけである。シーア派宗教界が非拘束名簿制を支持すると、シーア派議員は一斉に同様の立場を示し始めた。最も反応が早かったのは、ジャラールッディーン・サギール（ISCI幹部）であった。さらに、国会の法律委員会メンバーのビハーウ・アアラジー（サドル派幹部）も、非拘束名簿制は民意をより正確に反映すると述べて、非拘束名簿制を支持する考えを示した。これ以降、イラク各地で非拘束名簿制を支持するデモが発生した［*al-Ḥayāt* 7 Oct. 2009; 11 Oct. 2009; *SA* 7 Oct. 2009］。かくして、スィースターニーの呼びかけとそれに呼応するかたちでより民主的な制度を求める「世論」の圧力によって、各政党指導者は、しぶしぶ非拘束名簿制を導入せざるを得なくなったのである。

非拘束名簿制を導入した結果、①党幹部があらかじめ当選者をある程度予測できなくなる点、②それゆえに、党議拘束が弱くなる点、③スィースターニーが主張したように、「民意」を反映しやすく、透明性が高い選挙になる点、④リスト作成の戦略がより重要になる点、などの影響がみられた。なかでも④の政党の戦略が、今回の選挙では最も重要である。端的に言えば、どの選挙区に誰を何人出馬させるかが、極めて重要なポイントとなった。一人でも多くの出馬者を当選させるためには、地元に基盤を持つ知名度が高い候補者を適切な選挙区に配置せねばならず、一つの選挙区に多くの出馬者を擁立することから生じる票の分散を回避するために戦略を練る必要があるからである。ダアワ党が、マーリキー首相と並ぶ目玉候補として、イラクのイスラーム主義運動のカリスマ的創始者であるムハンマド・バーキル・サドルの実子ジャアファル・サドルをバグダードから出馬させたこと、ISCIが老練の政治家ナスィール・チャーテルジーを擁立したことなどは、こうした戦略の一端を示している。

第2の重要な変化は、総議席数が275から325議席に拡大したことである。この問題は、選挙法制定の遅れと密接に関連している。以下でみていこう。国会では、上述の非拘束名簿の問題、キルクー

2）　地方選挙で勝利を収めたダアワ党のサーミー・アスカリー幹部など、一部の政治家は、政党連合と候補者の双方を選択できる非拘束名簿制が民意の反映には有効であるとの見解を示していた［*al-Ḥayāt* 3 Jul. 2009］。

ク県をめぐる対立などの問題を調整し[3]、2009年11月8日に選挙法が承認された。同選挙法案は、2005年選挙法（法律第16号）の修正という形を取り、キルクーク県も例外なく比例代表制を適用すること、有権者10万人に1人の代表を選出すること（総議席数323議席）などを定めた［*al-Ṣabāḥ* 9 Nov. 2009］[4]。

しかし、この法案に対して、ターリク・ハーシミー副大統領が拒否権を行使し、法案を国会に差し戻した[5]。彼の修正要求は、①補償議席の割合を5%から15%に拡大すること、②在外イラク人（多くがスンナ派とされる）の代表権を担保するために、在外イラク人の代表が選出される19番目の県を作ること、であった［*al-Ḥayāt* 15 Nov. 2009; 16 Nov. 2009; 17 Nov. 2009; *SA* 16 Nov. 2009］。

ハーシミーの拒否権行使は、新たな問題をもたらした。あらゆる政党が、独自の権利を主張しはじめたのである。その最たるものが、クルド同盟によるクルド地域政府3県（ドホーク、スライマーニーヤ、イルビール）の議席数拡大要求であった。クルド側の言い分は、アラブ人の人口増加を過大に見積もっている一方で、クルド人の人口増加は過小評価されていることは問題であり、クルド3県への議席配分を拡大するべきだ、という点だった［*al-Zamān* 18 Nov. 2009; *SA* 18 Nov. 2009］。クルド同盟のこうした要求の背景には、2009年地方選挙での敗退による危機感があり、クルド同盟幹部マフムード・ウスマーンは、クルド3県の議席を拡大しない場合、クルド同盟は選挙をボイコットすると警告した［*INA* 17 Nov. 2009］。それの結果、政局は混乱を極め、「憲法上の空白」に陥った［*al-Ḥayāt* 19 Nov. 2009］。

危機感を強めたイラク国会は、11月23日、2回目の選挙法案を承認した。結果は、補償議席数の15%拡大と19番目の県の設置というハーシミーの要求は根拠がないとして拒否し、代わりにクルドの要請を部分的に受け入れた。11月23日修正選挙法案は、人口増加率を全国一律2.8%と推定し、全ての県で同一の議席数を増やす、という修正を加える結果となった［*al-Ḥayāt* 24 Nov. 2009; *al-ʻAdāla* 24 Nov. 2009］。これに対して、ハーシミーは再度拒否権を行使する可能性を見せたが、米大使館の圧力によって回避された［*ICG* 2010: 25］。その結果、国会は、11月23日の修正法案にさらに修正を加え、少数派にあらかじめ8議席を割り振り[6]、補償議席を7議席に縮小するという決定を、12月6日に承認した。大統領府は、12月9日にこの決定を承認し、正式な選挙法の成立となった。

こうして幕を閉じた「ハーシミーの変」は、結局、クルドの一人勝ちという結果に終わった。ハーシミーは在外イラク人の代表権を拒否され、当初は323議席中16議席（4.9%）あった補償議席は、「ハーシミーの変」後、少数派議席と合わせて325議席中15議席（4.6%）に減少した。一方でクルド同盟は、全国一律2.8%の人口増加率を選挙法に組み込んだことで（選挙法第1条1項）、クルド3県への合計議席配分を、38から41議席に拡大した。そして、「ハーシミーの変」は、選挙法の制定を大幅に遅らせ、1月16日の国会選挙実施は不可能となった。その結果、国会選挙は3月7日に延期された。

3）キルクーク県については、クルド地域政府への帰属を決める住民投票を2007年末までに実施する予定であったが、住民の範囲を決定する段階で生じた対立を調整できずに延期された。また、2009年1月の地方選挙でも、クルド勢力とアラブ人、トルコマーン人勢力の選挙制度をめぐる対立がこじれ、1県のみ例外的に選挙が延期された［山尾 2009］。今回の選挙でも様々な代替案が提示されたが、いずれもまとまらず、結局2005年の有権者登録のまま、例外扱いせずに選挙を実施することに決定された。

4）11月8日法案では、憲法に定められた2010年1月16日という当初の予定［*al-Ḥayāt* 24 Jul. 2009］通りの選挙実施が可能であった。

5）ハーシミーの拒否権は、彼が選挙連合を形成したアッラーウィーとイラク国民対話戦線のサーリフ・ムトラクの圧力によって発令された［ICG 2010: 22］。

6）少数派割り当て議席は、バグダード県でキリスト教徒とシャバックに1議席ずつ、ニーナワー県でキリスト教徒、サービア教徒、シャバックに1議席ずつ、キルクーク県でキリスト教徒に1議席、ドホーク県でキリスト教徒に1議席、イルビール県でキリスト教徒に1議席である（選挙法第1条3項）。

2. 政党連合の再編――分裂と統合のポリティクス

次に、政党連合の形成をめぐるポリティクスをみていこう。戦後イラクでは、極めて多数の政党が形成された。典型的な多党制が生まれた背景には、権威主義体制の重しが外れた新興民主主義国イラクに、比例代表制が導入されたという制度的要因があった。比例代表制は多党制を生み出す傾向が強いが、イラクでも典型的な多党制となり、いずれの政党も単独では政権を担えなくなった。それゆえに、政党が連合を形成し、出馬者の共通リストを形成するわけである。今回の選挙でも、298 の政党から 6172 人の出馬者が、12 の政党連合を形成した（主要政党連合については、図表 2 を参照）。

したがって、選挙で勝利を収めて政権を取るためにどの政党と連合するかという問題は、戦後のイラク政治を分析するうえで極めて重要になる。政党連合の形成をめぐる駆け引きは、パワーポリティクスの縮図となるからである[7)]。

今回の選挙の政党連合の形成をめぐっては、次の 2 点が極めて重要であった。第 1 に、政権党のシーア派イスラーム主義勢力「与党」が分裂したこと、第 2 に、アッラーウィーを中心に、多様な背景と利害を持つ世俗主義勢力「野党」がイラーキーヤに統合されたことである。順にみていこう。

【図表 2：主要政党連合】

政党リスト	主要加盟政党	指導者／主要メンバー	特徴
	独立アラブ潮流	アブー・ムトラク・ジャッブーリー	スンナ派の合意戦線の元主要メンバー。ジャアファリー政権下の副首相。スンナ派既存政党の指導者として、法治国家同盟で重要な位置にいる。
	ダアワ党イラク機構	ハーシム・マフムード	ダアワ党から離脱した組織で、アンズィーの国内機構の次に大きな政党。
	イラク独立統一ブロック	AS スルターン	ファイリー・クルド（シーア派クルド）の利害を代表する政党。
	タジャンムウ	マフディー・ハーフィズ	元イラク・リストの世俗派シーア派が中心。
イラク国民同盟 Al-I'tilāf al-Waṭanī al-'Irāqī	ISCI	アンマール・ハキーム アーディル・アブドゥルマフディー バヤーン・ジャブル フマーム・ハンムーディー JD サギール	009 年 9 月 1 日より ISCI 議長就任。シーア派イスラーム主義の中心政党。元々の政策は南部 9 県統合のシーア派地域政府形成だったが、1 月の地方選挙後にナショナルな言説を強化し始める。1 年間の政策表明では、様々なブレが生じる傾向が強い（地域政府→中央集権・国民統合、対バアス党穏健→バアス党排除）。
	バドル組織	ハーディー・アーミリー	ISCI の民兵組織から政党化。内務省の警察部門を寡占している。治安機関の政治化という問題で批判される。
	国民改革潮流	イブラーヒーム・ジャアファリー ファーリフ・ファイヤード	元ダアワ党員、2008 年 6 月 1 日に離脱・分派。宗派対立の克服とイラク国民の統一、ナショナリズム傾向が強い。地方選挙後は内部対立が激しく、多数の幹部がダアワ党に戻り、ジャアファリーと側近だけの小規模な政党となっている。
	解放ブロック（サドル派）	ムクタダー・サドル ナッサール・ルバイイー ファッラーフ・シャンシャル	2005 年以来、単独政党で最大議席を維持。UIA からの離脱を繰り返す。政策は反米、ナショナリズムが強く、貧民街に強い基盤を持つ。政策的にはダアワ党に近いが、マフディー軍の取り締まりの点でマーリキー首相と対立、法治国家同盟に加盟できず。ISCI との政策対立も頻繁に確認できる。元来イランの影響力が強い ISCI に批判的だが、ムクタダー自身近年はイランと近い。ISCI は親米だとの批判も頻繁に行う。
	ファディーラ党	フサイン・シャンマリー ハーシム・アリー	2007 年に UIA 離脱。地方選挙でバスラの拠点を大きく喪失した後、同盟に復帰することを決定。元々の母体のサドル派とは異なり、地方分権を主張、宗派主義的との批判をしばしば受ける。
	イラク・イスラーム行動組織	ムハンマド・アッバース	イラクのイスラーム主義組織のなかで、ダアワ党、SCIRI に次いで 3 番目であった組織を基盤にした、カルバラー中心のイスラーム主義政党。ムダッリスィーなどが中心。
	ダアワ党国内機構	アブドゥルカリーム・アンズィー	アンズィーを中心とするダアワ党離脱組のなかの最大組織。イラク機構とは異なる。

7） 戦後イラクの政党政治については、［山尾 2010a］を参照のこと。

政党リスト	主要加盟政党	指導者／主要メンバー	特徴
イラク国民同盟 Al-I'tilāf al-Waṭanī al-'Irāqī	INC	アフマド・チャラビー Iバハルルウルーム	世俗主義、親米、1990年代に反体制活動とワシントンを繋げたことで有名。
	国民民主党	ナスィール・チャーデルジー	Nチャーデルジーという老練の世俗派大物政治家を中心とした古参・伝統政党。
	中道潮流	ムワッファク・ルバイイー	ルバイイー元国家安全保障評議会議長を中心とする政党。
	アンバール救済戦線	ハミード・ハーイス	スンナ派、アンバール県の3大覚醒評議会の一角。イスラーム党と対立。部族の基盤を背景に、地方選挙で初めて県議会の議席を獲得。
イラク国民運動 Al-Ḥaraka al-Waṭanīya al-'Irāqīya （一般にイラーキーヤと呼ばれる）	INA	イヤード・アッラーウィー	イラク・リストの中心政党。世俗主義、リベラル派、宗派横断的リストの代表と主張するが、実態は超大物政治家とその取り巻き集団。UIAとの連合も模索していたが、政策レベルで対立、選挙戦略でしばしばムトラクと対立している。
	イラク国民対話戦線	サーリフ・ムトラク	スンナ派世俗主義、元バアス党員で、アラブ民族主義のイデオロギーが強い。地方選挙では、イラク国民計画リストを形成。中央集権的な強い政府の形成、脱宗派主義を主張。脱バアス党政策で選挙への出馬禁止決定を受ける。その後、ボイコットのポリティクスを展開。対話戦線自体は出馬者を擁立して選挙に参加。
	改新（タジュディード）リスト	ターリク・ハーシミー アブドゥルサッタール・カルブーリー ラーフィウ・アイサーウィー	ハーシミー副大統領（元イスラーム党の党首で合意戦線最高幹部）を中心とするスンナ派イスラーム主義。2009年5月にイスラーム党を離脱、改新リストを形成。宗派対立を克服し、超宗派的なナショナリズム醸成、社会統合などを主張。
	ハドゥバー・リスト	ウサーマー・ヌジャイフィー アスィール・ヌジャイフィー	地方選挙でクルド同盟に対抗するためにニーナワー県で形成されたアラブ人政党。職能組合、実務家、軍人などの寄せ集め政党で、イラク・リストとの連携が強い。
	ムスタクバル（未来）潮流	ザーヒル・アーニー フサイン・シャアラーン	元合意戦線の国会ブロック長。スンナ派のイスラーム主義の大物議員。問責・公正委員会によって出馬禁止の決定を受けた。
イラク統一同盟 I'tilāf Waḥda al-'Irāq	立憲党	ジャワード・ボラーニー ハーズィム・ドゥワイジュ	ボラーニー内相を中心とする世俗的ナショナリストを自称、宗派横断的（ボラーニーは元ファディーラ党のシーア派、2005年選挙はチャラビーと連合）。バドル軍団に寡占された内務省改革に取り組むが、失敗。ISCIよりサドル派に近い立場。法治国家同盟との連合を模索したが失敗、治安関係者が選挙に出馬することを批判され、一時的に出馬が危うくなった。
	イラク覚醒評議会	アフマド・アブー・リーシャ	スンナ派、アンバール県の3大覚醒評議会の一角。当初は法治国家同盟との連合を模索していたが、最終段階で調整できず、ボラーニー内相との連合を選択した。イスラーム党と激しい利害対立、地方選挙ではアンバール県最大議席獲得。反アルカイダ、イラク国民の統一、アラブ諸国の影響力拡大。
	憲章（ミーサーク）集団	アブドゥルガフール・サーマッラーイー（マフムード）	スンナ派ワクフ省長官（Aドゥライミーから2005年に委譲）。バアス党政権下で反シーア派姿勢、2005年以降米に協力、シーア派イスラーム主義政権に批判的だが、穏健な主張を展開。地方選挙以来、シーア派ワクフ省との連携を模索。
	共和集団	サアド・ジャンナービー	スンナ派。
	独立派	サアドゥーン・ドゥライミー	Sドゥライミー前国防省。他のアンバール県の部族のアブー・アッザーム・タミーミー。
イラク合意戦線 Jabha al-Tawāfuq al-'Irāqī	イスラーム党	ウサーマ・ティクリーティー イヤード・サーマッラーイー	2005年12月の選挙では、スンナ派最大の政党になったが、部族の覚醒評議会との利害対立などで影響力を縮小、地方選挙で大敗したことが大きな要因となって、同党が中心となっていた合意戦線が分裂した。とくにハーシミーの離脱は痛手。
	イラク国民のための統一会議	ハーリド・バルア	アドナーン・ドゥライミーが息子の逮捕などで影響力を喪失した後、バルアが2009年9月に議長に就任。イラク・な諸アナリズム、反占領、アラブ・イスラームのアイデンティティ強い。
	トルコマン公正党	アヌール・ガニー	ディヤーラー県。
	独立派	マシュハダーニー	マシュハダーニー前国会議長を中心とするスンナ派勢力。
	独立派	サリーム・ジャッブーリー	合意戦線の国会におけるブロック長の役割を長らく務めてきたSジャッブーリーを中心とする勢力。

政党リスト	主要加盟政党	指導者／主要メンバー	特徴
クルディスターン同盟	KDP	マスウード・バールザーニー	イルビール中心。Mバールザーニー大統領、ニチルワーン・バールザーニーは第1期首相。
	PUK	ターラバーニー ブラハム・サーリフ	スライマーニーヤ。Bサーリフは第2期首相。
	クルディスターン・イスラーム連合	サラーフッディーン・バハーウッディーン	同胞団とのつながりを持つクルドのイスラーム主義。変革リストが出現するまで最大のクルド野党。
変革リスト（ゴラーン）		ニチルワーン・ムスタファー	PUKのナンバー2のNムスタファーを中心に、2009年2月にPUKから離反する形で形成されたリスト。2009年8月のクルド地域政府の議会選挙では、111議席中25議席を獲得するなど、躍進を見せる。KDPとPUKの2大政党制に割って入る強力な野党の形成。クルド同盟への加盟は最終段階で決定された。

（出所）イラク独立選挙管理委員会ホームページ（http://www.ihec.iq/Arabic/; 2010年3月4日閲覧）、および各種報道をもとに、筆者作成。

第1に、政権党のイスラーム主義勢力が、マーリキー首相のダアワ党を中心とする「法治国家同盟」と、ISCIを中心とする「イラク国民同盟」に分裂した。マーリキー政権下では、ダアワ党とISCIを中心とするイラク統一同盟（以下、UIA）が政権を運営していたが、2009年地方選挙を機に分裂した。マーリキー首相がナショナリズムに基づく中央集権的な政策を強化したのに対し、ハキームのISCIは連邦制に基づく地域政府の形成を目指したため、両者の対立が顕在化したことが原因である。この政策対立の背景には、同じシーア派イスラーム主義政党でも、ダアワ党が1990年代からイラク・ナショナリズムを主張するようになったことに対して、ISCIはイランの影響下でシーア派イスラーム主義色を強めてきたという歴史的差異が横たわっている。これが中央集権的政府形成（ダアワ党）と、南部シーア派地域政府形成（ISCI）という、政策の差異につながった［Yamao 2010］[8]。

ダアワ党とISCIの政党連合の形成をめぐる駆け引きを、具体的にみていこう。マーリキー首相率いるダアワ党は、2009年地方選挙での大勝を背景に、今回の選挙でもISCIとは別の政党連合での出馬を目指した。というのも、地方政府の形成を目指すISCIの政策は、支持を集めないことが明らかになったからである［山尾 2009］。ゆえに、今回の選挙も単独出馬が有利である、とダアワ党は考えていた[9]。こうしたダアワ党の姿勢は、ハサン・サニード幹部が「ISCIはシーア派イスラーム主義色が強すぎる、国民に広く支持されるためには、脱宗派主義と広範な勢力を包含した連合形成が不可欠だ」［*InPA* 1 Jun. 2009］と発言したことに端的に表れている。

反対に、地方選挙での大敗を背景に、早いうちから政党連合形成の調整に奔走していたのがISCIである。ISCIは、6月初旬にはイラク国民会議（INC）のアフマド・チャラビーとの連合に合意した。ISCI幹部フマーム・ハンムーディーは、広範な勢力を取り込むことで、国民に幅広く受け入れられる政党連合になると強調し［*RD* 5 Jun. 2009］、ハンムーディーとアーディル・マフディー副大統領（ISCI幹部）らが中心になって、各勢力と連合形成の交渉を行った。当然ISCIは、ダアワ党との連合に基づく現政権UIAの再建を打診した［*MN* 7 Jun. 2009; *al-Ḥayāt* 9 Jun. 2009］。これに対して、ダアワ党は連合に明確な回答を示さなかった。

だが、テヘランで事態が急変した。アブドゥルアズィーズ・ハキームISCI議長は、当時テヘランで癌治療のために入院していたが、見舞いと称してダアワ党とISCIの幹部をテヘランに招集し

8）ダアワ党とSCIRIの歴史的な発展については、［Yamao 2008; 2009a］を参照。

9）こうしたダアワ党の戦略には、根拠がある。たとえば、スンナ派部族勢力のイラク覚醒評議会幹部が、ISCIに代表されるシーア派宗教勢力と連合しないことを条件に、ダアワ党と連合を形成したい考えを示していたことは［*Nūn* 28 Jul. 2009］、ダアワ党単独のほうがスンナ派勢力との連携関係を構築しやすい状況があったことを示している。

た［*ISCI* 3 Jun. 2009］。ここで、ダアワ党とISCIは、連合の基本原則について協議し、マーリキー首相はより広範な勢力を取り込むことを条件に、両党の連合に合意した［*al-Ḥayāt* 19 Jun. 2009］。これは、シーア派イスラーム主義勢力の統合とそのコントロールを目指すイラン政府の、1回目の介入となった。にもかかわらず、具体的な選挙綱領の作成の段階に入って、ダアワ党とISCIの対立が目立ち始めた。ダアワ党幹部のアリー・アディーブは、国民アイデンティティ形成のためには、既存のUIAでは不十分と批判し［*al-Ḥayāt* 12 Jul. 2009］、サーミー・アスカリー（ダアワ党幹部）も、もしUIAが国民的な連合に成長しなければ、ダアワ党は法治国家同盟として単独出馬する可能性もあるとの見解を提示した［*al-Ḥayāt* 6 Aug. 2009］[10]。こうして、スンナ派などの幅広い勢力を取り込んで、より大きな連合の形成を目指すダアワ党とISCIの対立がより明確になった。

その結果、ISCIは、サドル派やイブラーヒーム・ジャアファリーの改革潮流などを取り込んで、8月24日にイラク国民同盟の形成を発表した［*al-Zamān* 25 Aug. 2009］。ジャアファリーは、イラク国民同盟は、憲法と法治を信じ、宗派主義を否定する国民的な性格を持ち、イラク統一を進めることを強調した。マーリキー首相に対しては、イラク国民同盟への参加を呼び掛けた［*al-Ḥayāt* 25 Aug. 2009］。一方でダアワ党は、約1カ月遅れの10月1日に、スンナ派勢力や部族などを取り込んで、地方選挙以来の政党連合、法治国家同盟の形成を正式に発表した［*InPA* 1 Oct. 2009; *al-Ḥayāt* 2 Oct. 2009］。

かくして、ダアワ党とISCIは別々の政党連合で出馬することが決定した。とすれば、分裂したのはなぜなのか。それは第1に、マーリキー首相が、2009年地方選挙で大勝したことで自信を強め、法治国家同盟での出馬が有利と考えたことが挙げられる。ISCIが繰り返しダアワ党との連合を希求し、イランが数回にわたりシーア派イスラーム主義政党の統合の圧力をかけたにもかかわらず、単独出馬を決めたことは、マーリキー首相の自信を端的に示している。第2に、マーリキー首相の続投に、ISCIとサドル派の同意が得られなかったことがある[11]。第3に、イラン政府の影響力の低下がある。テヘランがマーリキー首相をコントロールできなくなったために［ICG 2010: 13］、シーア派イスラーム主義勢力の統合に失敗したのである。第4に、これまでシーア派イスラーム主義勢力をまとめる役割を果たしていたスィースターニーが中立姿勢を明確にしたことで、元々性格が異なるダアワ党とISCIは連合を維持できなくなった、と考えられる。

いずれにしても、シーア派イスラーム主義政権が分裂したことは、結果に大きな影響を与えた。その後も、イラク国民同盟はダアワ党率いる法治国家同盟の取り込み政策を継続し、イランのラリージャーニー国会議長も、イラクを訪問して両者の統合にむけた圧力をかけた［*al-Ḥayāt* 5 Dec. 2009; *al-Zamān* 5 Dec. 2009］（2回目の介入）。だが、いずれの試みも功を奏せず、結局、ダアワ党とISCIは分裂という結果に終わった[12]。シーア派イスラーム主義の「与党」が分裂したことは、分極化

10）ダアワ党幹部のアスカリーは、UIA形成でISCIと、①より広範な勢力を包含した国民的連合形成を目指すダアワ党と現状維持を主張するISCI、②非拘束名簿での議席配分を主張するダアワ党と、各主要政党に平等に議席を配分することを主張するISCI、③UIA内部の主導権をめぐる問題、の3点で対立していることを発表［*IPA* 10 Aug. 2009; *al-Zamān* 13 Aug. 2009］。

11）政策とイデオロギーの対立が現政権の分裂につながったが、一方で、選挙後の首班指名や組閣のポスト配分などにかんする交渉が決裂したことが原因だとの見解も多く挙げられている。ダアワ党がUIAへの合流が最終的に達成できなかったのは、同党が主張するUIA議席の51%配分率をISCIが承認しなかったこと、マーリキー首相の首班指名に反対する勢力が存在したことが原因と、サドル派幹部がリークしたことが示しているように［*RN* 25 Aug. 2009］、イデオロギーや政策対立の背景にある各党の利害関係の対立も大きな分裂要因であった。サドル派は、ダアワ党がUIAに加盟しない限り、マーリキー政権の第2期目はないと警告し［*al-Ḥayāt* 20 Sep. 2009］、ハンムーディーはISCIがマーリキーに首班指名を認めたら、彼はUIAと同盟するだろうと指摘している［ICG 2010: 13］。

12）だが、年が明けてスィースターニーと会談後、マーリキー首相は、「法治国家同盟がイラク国民同盟に合流することはイラク国民の利益に適合する」と主張し、票の拡散を回避して再合流への意思を表明したが、ハンムーディーを中心とするISCI幹部はこれに猛反対、連合の提案を否定した［*al-Ḥayāt* 6 Jan. 2010; *al-Wasaṭ* 8 Jan. 2010］。

の進行と票の分散を帰結することになる。

さて、今回の政党連合形成の第2の特徴は、アッラーウィーが、これまで複数の政党に分散していた世俗主義勢力を中心とする「野党」を統合し、スンナ派の代表であったイラク合意戦線の中核勢力を取り込んで大連合を形成したことである。これまで世俗派は、アッラーウィーのイラク国民リストとサーリフ・ムトラク率いるイラク国民対話戦線などに分かれていた。それが今回の選挙でイラーキーヤに統合した。それに加えて、ハーシミー副大統領がイラク合意戦線を離脱、腹心であるアブドゥルサッタール・カルブーリーなどの合意戦線幹部を引き連れて、新党「革新リスト」を形成し、イラーキーヤに合流した［*al-Ḥayāt* 27 Nov. 2009］。この背景には、合意戦線が2009年地方選挙で大敗し、勢力が衰退したために、ハーシミーなどの一部有力幹部が合意戦線に見切りをつけたことがあった。その結果、「リベラリズムこそが解決だ」とのスローガンを掲げ、アッラーウィーとムトラクを中心に、合意戦線からハーシミー副大統領、ラーウィウ・アイサーウィー副首相、サラーム・ズービイー前副首相、地方選挙で台頭したハドゥバー・リストのヌジャイフィー兄弟（対クルド強硬派）などの有力者を幅広く取り込むことに成功した［*al-Ḥayāt* 1 Nov. 2009; *SA* 1 Nov. 2009］[13]。イラーキーヤの選挙綱領は、マーリキー首相の法治国家同盟と同様に、中央集権と脱宗派主義的なナショナリズム政策を基軸とするものの、第1原則を世俗主義に置く点で異なっている［*SA* 20 Jan. 2010］。

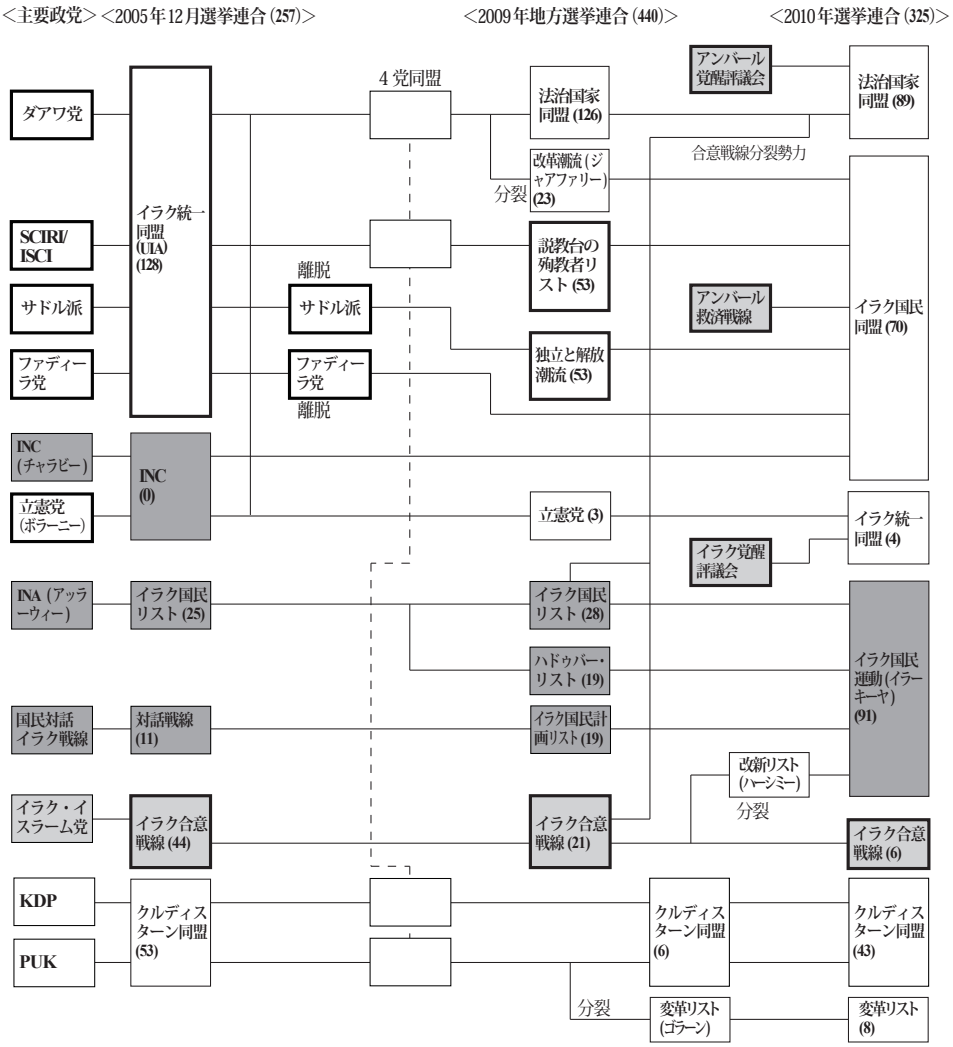
かくして、イラーキーヤは幅広い勢力からなる大連合を形成した。世俗主義勢力「野党」の統合は、法治国家同盟とイラク国民同盟に分裂したイスラーム主義勢力「与党」と比較すると、好対照である。イラーキーヤは、大連合の形成に成功したことで、票割れを回避することが可能となる。だが、一方でこうした勢力は、マーリキー政権交代という1点のみで共通した「脆弱な大連合」である点には留意しなければならない。

以上でみてきたように、今回の選挙では、既存の政党連合が解体・再編され、宗派横断的な連合が形成された。図表3は、2005年12月の国会選挙以降の政党連合の変遷を示したものである。上述のように、現政権のUIAは、法治国家同盟とイラク国民同盟に分裂し、世俗主義勢力はイラーキーヤへ統合している。また、スンナ派の元合意戦線幹部アブー・ムトラク・ジャッブーリー（独立アラブ潮流）や、世俗主義のマフディー・ハーフィズが、シーア派中心の法治国家同盟に参入したことも、既存の連合が宗派横断的に再編されたことを端的に示している。さらに、スンナ派部族を中心とした覚醒評議会も、シーア派主導の三つの連合に加盟した[14]。最もシーア派イスラーム主義色の強いイラク国民同盟でさえ、チャーテルジーや覚醒評議会などのスンナ派勢力を取り込んでいる。こうして、今回の選挙の政党連合は、宗派横断的に再編されることとなった（図表2、3参照）。

13）対クルド強硬派のハドゥバー・リストとヌジャイフィー兄弟については、［山尾 2009］を参照。

14）覚醒評議会は、2006年中旬に治安回復を優先させるために米軍が部族に資金・武器を提供して形成した非公的治安機関である。大規模で主要3覚醒評議会は、今回の選挙で別々の政党連合に参加した。アリー・ハーティムのアンバール覚醒評議会は法治国家同盟、ハミード・ハーイスのアンバール救済評議会はイラク国民同盟、アフマド・アブーリーシャのイラク覚醒評議会はボラーニー内相率いるイラク統一同盟と、それぞれ連合した。覚醒評議会については、［山尾 2010b］を参照のこと。

【図表 3：主要政党の変遷】



（注）太枠はシーア派、太枠網掛けはスンナ派、濃い網掛けは世俗主義、その他は世俗主義でも宗派主義でもない政党を示す（クルドは例外）、( ) 内は議席数を示す。
（出所）筆者作成。

3. 争点――脱バアス党法をめぐる競合の再浮上

最後に、図表 4 をもとに、争点をみてみよう。今回の選挙では、争点にかんして相反する二つの側面が指摘できる。第 1 に、選挙綱領に示された政策が、いずれの政党連合も酷似している点である。具体的には、クルド同盟を除く全ての主要政党連合が、中央集権的で脱宗派主義的な国民統合を目指すナショナリズムを掲げた。最もナショナリズム色が強いのがダアワ党で、宗派対立の克服と、治安の維持を最大の目標に位置付けた。ダアワ党は、2009 年 8 月 13 ～ 15 日、「イラク統一会議」（Mu’tamar al-Waḥda al-Waṭanīya）というスローガンを掲げて、第 15 回目の党総会を開催した。閉幕宣言では、脱宗派主義、イラク国民の統一、国民的な政党連合の形成、強い中央集権国家（ḥukūma markazīya qawīya）の建設、地方諸県との調整を今後のダアワ党の政策課題にすることが

決定された［*MN* 18 Aug. 2009］[15]。アッラーウィーのイラーキーヤも、上述のように中央集権的なナショナリズム政策を強調した。2009 年地方選挙で、南部の地域政府形成を最重要課題に掲げていた ISCI さえも、地域政府形成を棚上げし、中央集権的な国民統合とナショナリズムを政策課題に掲げた。地方選挙で中央集権型の政策を掲げるダアワ党が勝利したことで、ISCI は地方分権を進めて地方政府を形成する政策を取りにくくなったことが、この政策変化の背景にある［*al-Ḥayāt* 2 Feb. 2009］。アンマール・ハキーム新議長の「今後 ISCI を中心とする政党連合は、集権的でイラク国民的なそれにするべきである」［*al-Ḥayāt* 11 Jun. 2009］との発言にみられるように、イラクの分断を惹起する南部地域政府の形成は世論の支持を受けない、ということを ISCI は認識した。ゆえに、国民統合とイラク統一を目指す政策にシフトしたのである[16]。このように、ダアワ党率いる法治国家同盟が、中央集権とナショナリズムを主張して地方選挙で大勝したことが、他政党の選挙綱領に影響を与えた。

第 2 に、選挙綱領が酷似しているにもかかわらず、国民和解をめぐる考え方が根本的に異なることである。既に述べたように、世俗主義かイスラーム主義かをめぐって、イラーキーヤと他の政党連合は異なる立場を取っている。だが、より重要なのは、旧バアス党員の政治プロセスへの復帰をどの程度認めるかという問題である。アッラーウィーのイラーキーヤは、「全てのイラク人のイラクのために」をスローガンにし、旧バアス党勢力の政治参加を容認する姿勢を取っている。一方でマーリキー首相の法治国家同盟（とりわけダアワ党）は、徹底的な旧バアス党排除政策を基軸とする（図表 4 の網掛け参照）。こうした法治国家同盟の政策は、マーリキー首相の「政府の権限を行使してでも、旧バアス党員の選挙参加を徹底的に回避する」［*al-Zamān* 11 Nov. 2009］との発言に端的に表れている。2005 年 1 月の制憲議会選挙をめぐって、酒井が「アッラーウィー暫定政府によるフセイン体制の部分否定政策から、UIA の全否定政策への転換」［酒井 2005: 34］と分析しているように、こうした両者の対立は、戦後一貫している。これに対して、イラク国民同盟の中心勢力のサドル派は、マーリキー首相と同様のバアス党排除政策を掲げるが、ISCI の政策は曖昧である［*al-Ḥayāt* 26 Feb. 2010］[17]。

こうした旧バアス党員に対する政策対立が今回の選挙で浮上したのは、問責・公正組織（Hay’a al-Musā’ala wa al-‘Adāla）が、出馬者が脱バアス党法に抵触していないか、事前審査を開始したことが原因だった[18]。2010 年 1 月になって、問責・公正組織は突如として、14 政党、約 400 人の出馬者が、脱バアス党法に抵触するために出馬禁止にする、という決定を発表した。大きな問題に発展したのは、出馬禁止の決定をうけた候補者に、イラーキーヤに合流した対話戦線党首のサーリフ・ムトラクや合意戦線ブロック長のザーフィル・アーニーなどの現職有力議員が多数含まれていたからである［*al-Ḥayāt* 7 Jan. 2010; 8 Jan. 2010］。

15）同会議で、マーリキー首相が党首にあたる書記長（amīn ‘āmm）に再選された［*MN* 18 Aug. 2009］。

16）ISCI 幹部は、今後の政党の方針について、宗派・民族横断的な同盟形成と政策を展開することを明言した［*al-Milaff* 18 Jun. 2009; *al-Ḥayāt* 19 Jun. 2009］。ISCI 幹部のハンムーディーは、マーリキー首相の国民統合的な政策を、一転して強く支持する考えを示した（http://www.hamoudi.org/arabic/news_view_184.html; 2009 年 6 月 21 日閲覧）。ISCI としては、国民和解、ナショナリズム、中央集権などの政策を掲げるダアワ党＝マーリキー首相ラインとの差をつけるために、ISCI の得意な外交問題、とりわけジャアファリーなどを使ったアラブ諸国との関係の強化を選挙戦略の主軸に掲げたい考えを持っている［*al-Ḥayāt* 29 Dec. 2009］。イラク国民同盟の選挙綱領については、［*MN* 15 Feb. 2010］を参照。

17）アンマール・ハキーム ISCI 議長は当初、犯罪歴のない旧バアス党員を政治に復帰させることを呼び掛けていたが、連合パートナーのサドル派がこの政策を強く批判したことで、2010 年 1 月頃から ISCI は公式見解で旧バアス党員の完全排除政策を支持していくようになった［*al-Ḥayāt* 19 Nov. 2009; 23 Jan. 2010］。

18）問責・公正組織は、2008 年 2 月の脱バアス党法に基づいて形成された独立委員会で、旧バアス党員を公職から排除するための審査を行う。同組織の委員長はアフマド・チャラビー、執行委員長はアリー・ラーミーが務める。

脱バアス党法案に基づく出馬禁止政策は、今回の選挙で初めて導入された。さらに、それが現職議員にまで適用されたことで、大スキャンダルへと発展した。その後、約1カ月以上にわたってムトラクら出馬禁止議員と問責・公正組織が批判合戦を展開した。ムトラクはこの決定がイラン政府の圧力であると批判し、同組織は憲法の厳密な適用だと反批判した［*al-Ḥayāt* 13 Feb. 2010］[19]。事態は連邦最高裁への告訴にまで発展したが、2月12日の選挙キャンペーン開始にさいして裁判が打ち切られ、最終的には、約500人の出馬禁止が決定された［*INA* 12 Feb. 2010］。出馬禁止の決定を受けたのは、イラーキーヤ72人、ボラーニー内相のイラク統一同盟67人、イヤード・ジャマールッディーンの解放リスト20人などで、ほとんどが世俗主義者であった［ICG 2010: 29］。この決定に対して、ムトラクは選挙のボイコットを宣言したが、最終的には彼以外の候補者は出馬した［*al-Ḥayāt* 20 Feb. 2010; *S* 26 Feb. 2010］。

旧バアス党員の排除をめぐる選挙直前の対立は、現政権「与党」がアッラーウィーを中心とする「野党」の統合と台頭に危機感を強めたことを反映している。言い換えれば、勢力を拡大するイラーキーヤに対して、その一角を担うムトラクを排除する政権党の政治的判断であったとの解釈もできる。というのも、こうした脱バアス党政策に対して、政権「与党」は常に支持を表明してきたからであり、反対に「野党」は、問責・公正組織の決定が、チャラビーによるアッラーウィーとムトラク外しだと批判してきたからである［*SA* 2 Mar. 2010］。

だが、たとえこれが政権「与党」の政治的な判断によるイラーキーヤ崩しだったとしても、国民からの一定の支持を獲得していることだけは間違いない。というのも、問責・公正組織による旧バアス党員の出馬禁止決定が発表されてから、全国でそれを支持するデモが頻発したことは［*INA* 8 Feb. 2010; *S* 11 Feb. 2010］、現在もなお旧バアス党勢力の排除は国民の支持を獲得できる、という事実を如実に示しているからである。

いずれにせよ、選挙綱領が酷似している以上、今回の選挙の争点は脱バアス党政策だけが明確な争点になり得た。旧バアス党員の政治プロセスへの復帰をどの程度認めるかという問題は、言い換えれば、前政権の遺産をどのように清算して国民和解を実現するか、という問題に他ならない。国民和解をめぐる問題は、突き詰めて言えば、国民統合の境界をどこに引くか、というより根本的な問題へと発展していく可能性が高い。どの程度の旧バアス党員が、国民和解を経て新たな国民統合の枠組みに復帰できるのか、この問題をめぐって、法治国家同盟とイラーキーヤが対立したのである。そして、こうした問題に対する民意は、投票日直前の世論調査の支持率（法治国家同盟29.9%、イラーキーヤ21.8%、イラク国民同盟17.2%）が示しているように、収斂することなく分極化していた[20]。

以上で論じてきたことは、次のように整理できるだろう。選挙結果を大きく左右するパワーポリティクスの縮図である政党連合形成においては、①シーア派イスラーム主義政権「与党」の分裂が見られ、反対に、②世俗主義勢力「野党」の統合が達成された。全体としてみれば、③既存の連合の再編と宗派横断的連合の形成が生じ、④各政党連合ともに類似した政策を掲げたが、⑤国民和解にかかわる脱バアス党政策に対する姿勢のみが対立していた、ということである。

19）オディエルノ在イラク駐留米軍最高司令官は、問責・公正組織の行き過ぎた脱バアス党法の適用はさらなる混乱を招くだけではなく、ラーミーなどの同組織幹部はイランの影響下にあると主張し、問責・公正組織を批判した［*al-Ḥayāt* 18 Feb. 2010］。

20）イラク国立報道センターが実施した世論調査の結果を抜粋。調査は、18県で合計5,000サンプル、都市部66%、農村部34%、男性53%、女性47%の割合で実施された［*al-Ḥayāt* 25 Feb. 2010］を参照。

【図表 4：主要政党連合の政策綱領の比較】

	国民統合		国民和解		国家・政府の形態			対外政策	
	ナショナリズム	脱宗派主義	脱バアス党政策徹底	旧バアス党員の取り込み	中央集権	地方分権	世俗主義	近隣諸国との関係	反米軍占領
法治国家同盟	○	○	○	×	○	×	×	△	△
イラク国民同盟	○	○	○ 1)	×	△ 2)	△	×	○	○ 3)
イラーキーヤ	○	○	×	○	○	×	○	○	△
クルド同盟	△	△	○	×	×	○	△	○	△
イラク合意戦線	○	○	△	△	○	×	×	△	○
イラク統一同盟	○	○	○	×	○	×	×	○	△

（注）1）ISCI を中心に、当初は旧バアス党員の一部の取り込みを支持していたが、サドル派の批判によって、徹底した旧バス党員の排除を政策に掲げるようになった。
2）2009 年地方選挙までは、連邦制に基づく地方分権、地方政府の形成を主張していたが、政策変更。
3）イラク国民同盟内の、サドル派は、強い反米・反占領姿勢を取っている。
（出所）各種報道をもとに、筆者作成。

III. 選挙結果の分析――票の分散と政治の分極化

本節では、はじめに投票日から 20 日経過した 3 月 27 日に発表された結果を概観し、次にこうした結果はどのような特徴を持っているのか、という問題を分析する。

1. 結果――イラーキーヤ、法治国家同盟、イラク国民同盟

3 月 7 日に行われ、3 月 20 日に発表された開票結果は、図表 5 に整理したように、91 議席を獲得したイラーキーヤが第 1 党に、89 議席の法治国家同盟が微差で第 2 党に、70 議席を獲得したイラク国民同盟が第 3 党に、43 議席のクルド同盟が第 4 党になるという結果に終わった。

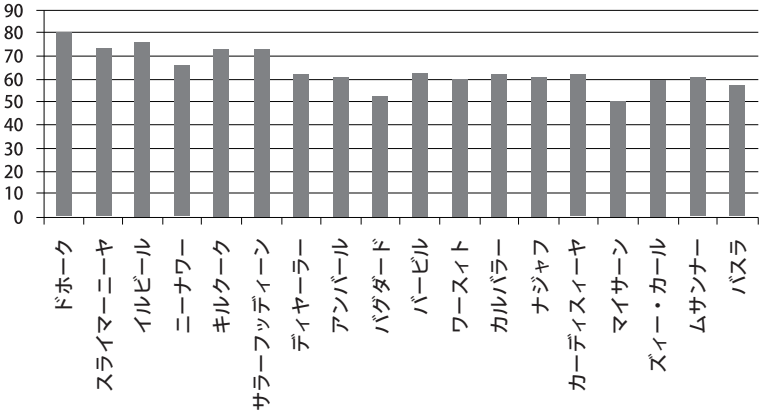
アッラーウィーのイラーキーヤが、第 1 党に躍進を遂げたのは、次の三つの理由があった。第 1 に、政権交代への期待が高まったことである。宗派に偏りがちな宗教政党を牽制し、宗派横断的な包括政党の形成を求める人々が増加した。こうした人々は、真の意味での宗派横断的な政策は、宗教政党ではなく、世俗主義政党こそが実現可能であると主張し、政権交代を求めた。また、4 年間のマーリキー政権で、汚職などの問題も、政権交代の主張の根拠となった。汚職に対する批判は、南部シーア派地域では、政治不信という形で表出した。これを反映して、南部では投票率が低かった。一方で北部では、政治不信に対して、投票の棄権という対応をするのではなく、政権交代のために投票する、という選択肢を取った有権者が多かった。イラーキーヤが高い得票率を獲得した北部（アンバール、サラーフッディーン、ディヤーラー、ニーナワー）4 県で投票率が相対的に高かったことは、世俗的な政権の形成に期待し、より積極的に投票に参加したことを傍証しているだろう（図表 6 を参照）。

【図表 5：主要政党連合の獲得議席数・得票数・得票率（3 月 27 日発表）】

	法治国家同盟	イラク国民同盟	イラク国民運動（イラーキーヤ）	イラク統一同盟	イラク合意戦線	クルディスターン同盟	変革リスト（ゴラーン）	その他	合計
ドホーク		192 (0)				9 332,951 (76.1)	23,775 (5.4)	1 80,468 (18.4)	10 (1)
スライマーニーヤ		205 (0)				8 350,283 (42.0)	6 298,621 (35.8)		17
イルビール		431 (0)				10 458,403 (66.9)	2 103,397 (15.1)	2 123,644 (18.0)	14 (1)
ニーナワー	17,475 (1.6)	1 38,693 (3.2)	20 593,936 (52.9)	1 53,897 (4.8)	1 64,204 (4.1)	8 239,109 (21.3)	10,715 (1.0)	106,427 (9.5)	31 (3)
キルクーク	13,514 (2.4)	14,230 (2.5)	6 211,675 (37.7)		17,236 (3.1)	6 206,542 (36.9)	36,554 (6.6)	60,994 (10.9)	12 (1)
サラーフッディーン	32,815 (6.7)	22,576 (4.6)	8 233,591 (47.7)	2 52,942 (10.9)	2 60,241 (12.3)	22,676 (4.6)	2,654 (0.5)	62,339 (12.7)	12
ディヤーラー	1 63,969 (12.7)	3 85,821 (17.0)	8 245,025 (48.6)	6,980 (1.4)	25,125 (5.0)	1 47,479 (9.4)	8,994 (1.8)	20,607 (4.1)	13
アンバール	6,536 (1.4)	5,007 (1.1)	11 294,420 (62.2)	1 43,224 (9.1)	2 56,171 (11.9)			68,182 (14.4)	14
バグダード	26 903,360 (35.3)	17 561,659 (22.0)	24 841,755 (32.9)	32,924 (1.3)	1 53,413 (2.1)	23,263 (0.9)	2,471 (0.1)	138,418 (5.4)	68 (2)
バービル	8 231,939 (39.4)	5 180,193 (30.6)	3 104,746 (17.8)	16,836 (2.9)	9,013 (1.5)	1,227 (0.2)		44,009 (7.5)	16
ワースィト	5 149,828 (39.6)	4 129,188 (34.2)	2 51,003 (13.5)	19,201 (5.1)		955 (0.3)		27,834 (7.4)	11
カルバラー	6 179,517 (53.7)	3 81,794 (24.5)	1 36,061 (10.8)	11,135 (3.3)				26,015 (7.8)	10
ナジャフ	7 197,377 (47.9)	5 152,698 (37.0)	30,810 (7.5)	7,752 (1.9)		538 (0.1)		23,170 (5.6)	12
カーディスィーヤ	4 133,067 (35.5)	5 133,821 (35.7)	2 55,030 (14.7)	12,842 (3.4)		849 (0.2)		38,871 (10.4)	11
マイサーン	4 102,566 (37.5)	6 135,319 (49.5)	16,473 (6.0)	5,296 (1.9)				13,881 (5.1)	10
ズィー・カール	8 235,446 (41.0)	9 244,818 (42.7)	1 43,706 (7.6)	20,419 (3.6)		348 (0.1)		28,859 (5.0)	18
ムサンナー	4 98,998 (43.1)	3 71,699 (31.2)	18,205 (7.9)	21,738 (9.5)	713 (0.3)	1,451 (0.6)		17,001 (7.4)	7
バスラ	14 431,217 (52.9)	7 237,010 (29.1)	3 75,387 (9.3)	9,637 (1.2)	17,361 (2.1)			43,971 (5.4)	24
補償議席	2	2	2			1			7
合計	89 2,797,644 (24.0)	70 2,095,354 (18)	91 2,851,823 (24.5)	4 314,823 (2.7)	6 303,477 (2.6)	43 1,686,074 (14.5)	8 487,181 (4.2)	6 1,110,037 (9.5)	325 (7+8)

（注）上段は獲得議席数、下段は得票数、( ) 内は得票率、をそれぞれ示す。
（出所）イラク独立選挙管理員会ホームページをもとに筆者作成（得票率の計算は筆者）。

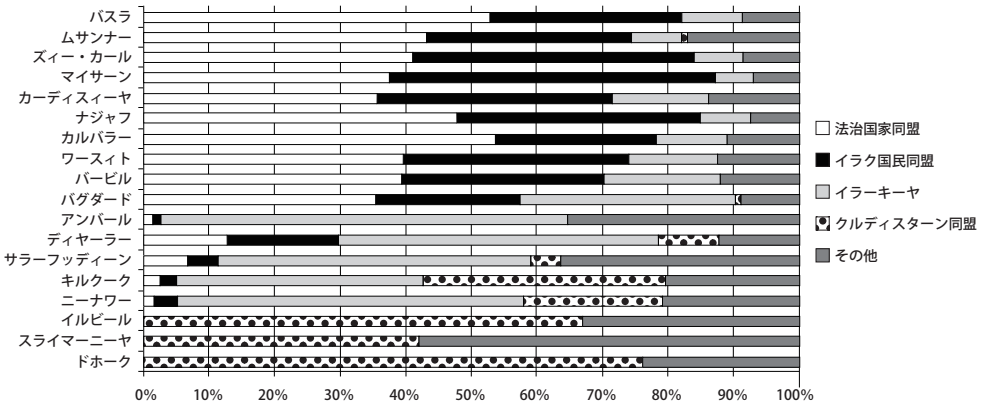
【図表 6：県別投票率】



（出所）［*INA* 9 Mar 2010］をもとに、筆者作成。

第2に、イラーキーヤが、イスラーム主義の現政権の政権交代を望む世俗派、インテリ層、ムトラクなどの旧バアス党勢力を統合したことで票割れを回避することに成功したことである。さらに、これまでスンナ派の利害を代表していた最大政党の合意戦線のなかから、ハーシミー副大統領やアイサーウィー副首相などの有力政治家がイラーキーヤに合流したことは既に述べたが、その結果、これまで合意戦線の票田であったアンバール県やニーナワー県の票の大部分が、イラーキーヤに流れた（図表7参照）。

【図表7：主要政党連合の県別の得票率】



（出所）イラク独立選挙管理員会ホームページをもとに、筆者作成。

アンバール県ではアイサーウィー副首相が約8万票、ニーナワー県ではハドゥバー・リストのウサーマ・ヌジャイフィーが約27万票を獲得して、他の出馬者を大きく引き離して第1位当選を果たしている。興味深いのは、アイサーウィーやヌジャイフィーの例にみられるように、イラーキーヤ内部で高い得票数を獲得した出馬者はみな、マーリキー政権後期に台頭した新たな地元政治家であるという点である。アイサーウィーはバアス党前政権下でアンバール県の国立病院の医者であり、ヌジャイフィーも2009年地方選挙でシャンマル部族と同盟関係を構築して台頭した。マーリキー政権打倒を掲げて、世俗派、インテリ層、旧バアス党勢力に加えて、こうした新たな地元勢力を取り込むことに成功したことが、アンバール、サラーフッディーン、ディヤーラー、ニーナワーの4県で、過半数前後の得票率を獲得して圧勝という、イラーキーヤの躍進につながったのである。

図表8はイラーキーヤ加盟政党の県別議席獲得数を整理したものである。アッラーウィー率いるイラク・リストは南部諸県とサラーフッディーン県、およびバグダード県で多くの議席を獲得しているが、その割合は30%程度にとどまっている。他方、北部のニーナワー県では、ハドゥバーの独壇場になっており、元合意戦線の3政党（ハーシミー、カルブーリー、アイサーウィーが主導する政党）の合計議席は27議席で、アッラーウィーのイラク・リストと同数である。つまり、イラーキーヤのなかで、アッラーウィーのイラク・リストは、合意戦線の分派と地方の地元勢力との連合をどうしても維持しなければならない状況にある。イラク・リストは、2005年12月の国会選挙では25議席を獲得したが［山尾 2007: 241］、今回の選挙でも、イラク・リスト単独でみればわずか27議席で、議席を伸ばしたとはとても言えない。つまり、アッラーウィーのイラク・リストが勝利したのではない。合意戦線からの分派と地方の勢力を統合し、「脆弱な大連合」を形成したことで初めて、かろうじて第1党になることができたのである。

【図表8：イラーキーヤ加盟政党の県別議席獲得数】

（単位：議席数〔（）内は%〕）

	アッラーウィー（イラク・リスト）	ハーシミー（改新リスト）	ムトラク（対話戦線）	カルブーリー（改革と開発）	ヌジャイフィー（ハドゥバー）	アイサーウィー（国民未来集団）	その他	合計
ニーナワー	2	1	2	1	7		7*	20
キルクーク			2	1			3	6
サラーフッディーン	4	1	1	1		1		8
ディヤーラー	1		4	1	1	1		8
アンバール		2	3	3		3		11
バグダード	8	3	4	5	1	3		24
バービル	3							3
ワースィト	2							2
カルバラー	1							1
カーディスィーヤ	2							2
ズィー・カール	1							1
バスラ	3							3
合計	27 (30.34)	7 (7.87)	16 (17.98)	12 (13.48)	9 (10.11)	8 (8.99)	10 (11.24)	89 (100)

（注）* はガーズィー・ヤーウィルの支持者を中心とするニーナワー県の地元政党。

（出所）http://www.alhal.org/ar/Portals/0/Documents/%D8%A7%D8%B3%D9%85%D8%A7%D8%A1%20%D8%A7%D9%84%D9%81%D8%A7%D8%A6%D8%B2%D9%8A%D9%86%20.pdf をもとに、筆者作成。

第3に、イラーキーヤが票の分散回避に成功したことと表裏一体の関係にあるが、「与党」が法治国家同盟とイラク国民同盟に分裂したことで、票が分散したこと、これがイラーキーヤを相対的に第1党に躍進させた決定的な要因となった。これは、選挙前から指摘されていた。たとえば、ムワッファク・ルバイイー前国家安全保障評議会議長は、法治国家同盟とイラク国民同盟が分裂することで票割れを起こし、それが政治的不安定に帰結すると警告を発していた［*al-Ḥayāt* 13 Nov. 2009］。無論、法治国家同盟とイラク国民同盟が分裂しなければ、過半数近く獲得したと単純に言うことはできない。だが、ルバイイーが指摘する通り、政権党UIAの分裂が、イラーキーヤの第1党への躍進につながったことだけは、否定できない。

一方で、政権党であり、かつ2009年地方選挙で大勝したダアワ党を中心とする法治国家同盟が第2党になった要因は、次の3点に整理できるだろう。第1に、第2党に転落したと考えるならば、イラーキーヤが勝利した原因と同様に、シーア派イスラーム主義勢力の「与党」が分裂し、票が拡散したことが最大の敗因である。

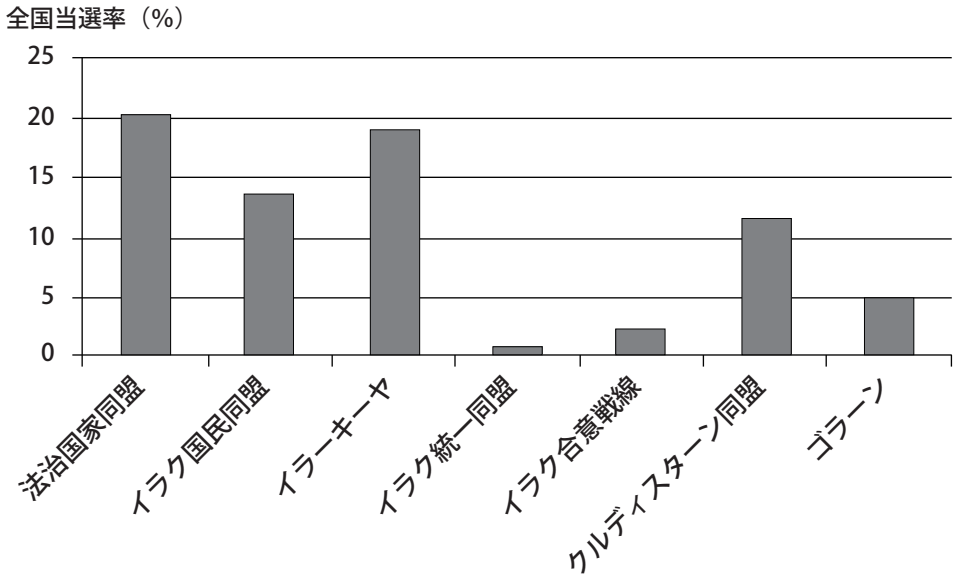
第2に、「与党」の分裂にもかかわらず、僅差で第2党にとどまったと評価するのであれば、ナショナリズムに基づく中央集権的な政策、国民和解、治安維持・秩序回復などの政策が評価されたことに勝因が求められる。言い換えるなら、マーリキー政権の業績が評価されたとも解釈できる。とりわけ、スンナ派勢力や部族を取り込み、宗派横断的な連合の形成にある程度成功したことが法治国家同盟の支持を強固にした。地方の有力者の取り込み政策は功を奏し、地域コミュニティからの支持を確たるものにしたのである。マーリキーを中心とする首相府は、南部のシーア派部族を組織化し、独自に予算をつけて「イスナード評議会」を形成して治安維持にあたらせていた。こうした南部の部族は、法治国家同盟の強固な支持基盤となった［*al-Ḥayāt* 4 Apr. 2010］。マーリキー首相が選挙キャンペーン中に南部を中心に重点的に地方回りを行ったのも、こうした理由があった[21)]。この支持基盤の確立が、カルバラー、ナジャフ、ムサンナー県をはじめ、南部6県での過半数近い

21）反対に、イラーキーヤは近隣諸国との関係を重視した。アッラーウィーは、2月末から3月頭にかけてリヤド、アンカラ、カイロ、ダマスカスを訪問して選挙後の新政権との関係について協議し、ハーシミーは3月に入ってダマスカスでアサド大統領と会談、ヨルダンで在外イラク人に支持を要請した［*SA* 1 Mar. 2010; 5 Mar. 2010; *al-Ḥayāt* 2 Mar. 2010; 3 Mar. 2010］。

得票率を獲得する要因となったのである。

第3に、法治国家同盟は、非拘束名簿制という制度の特徴をよく理解した戦略を立てた。これが票の伸びにつながった。具体的には、各選挙区に有力政治家を配備し、票割れを起こさないように候補者を配置した。例えば、ジャアファル・サドルなどの人気が高い候補者、あるいは地方に根差した候補者などを擁立した。また、バグダード県では、マーリキー首相1人で約62万票を獲得したことで、1,800票という比較的少ない得票の候補者も当選させることに成功した[22)]。票割れの回避という点では、当選率を比較した図表9が端的に示しているように、法治国家同盟が約20%という最も高い当選率で、票割れを防いだ。それに加えて、女性枠を適用した当落（後述）も他の政党連合と比較して非常に小さく、各県に配置した女性出馬者が必要な得票数を獲得した。こうした事実は、非拘束名簿制比例代表制という選挙制度の特徴をよく把握してリストを形成したことを端的に示している。この背景には、ダアワ党が、Facebook や Youtube などのインターネットのサイトを利用した支持呼びかけを行い、また西洋の選挙コンサルタントに戦略作成を依頼したという事実があった［*MN* 13 Feb. 2010］。

【図表9：主要政党の当選率】



（出所）イラク独立選挙管理員会ホームページをもとに、筆者作成。

とはいえ、イラーキーヤと法治国家同盟は、ほとんど差がなかった。獲得議席数こそ2議席の差があるものの、バグダード県の個人得票数をみると、マーリキーが約62万、アッラーウィーが約41万の得票数で、個人レベルではマーリキー首相が圧倒的に高い得票を誇っている[23)]。

これに対して、地方選挙で大敗したISCIを中心とするイラク国民同盟が、南東部3県（カーディ

22）これと対照的に、有力政治家の得票の戦略がうまく機能しなかったイラク国民同盟は、バグダード県では6,000票を獲得しても当選できなかった。

23）全国の個人得票率は、1位マーリキー首相（622,961票）、2位アッラーウィー（407,537票）、3位ウサーマ・ヌジャイフィー（274,741票）、4位ハーシミー副大統領（200,963票）、5位ジャアファリー（101,053票）となっている（ヌジャイフィーはニーナワー県、それ以外はバグダード県）。選管のHPをもとに筆者計算。

スィーヤ、マイサーン、ズィー・カール）で得票率を伸ばし、第3党に持ち直したのは、次の二つの要因があった。第1に、既に指摘したように、地方政府形成からナショナリズムに基づく中央集権的な政策へと政策を大きく変更したことで、支持を回復したことである。これは、イラクの分断を惹起させる地域政府の形成が世論の支持を得ないことを認識したこと、アブドゥルアズィーズ・ハキーム前議長の死去後の、息子アンマール・ハキーム新議長就任によって、ISCIの政策を柔軟に変更することが可能となったこと、などの要因が重なった結果であった[24)]。

第2に、より重要な要因として、イラク国民同盟に合流したサドル派が大きく票を伸ばしたことが挙げられる（図表10）。さらに、同じイラク国民同盟内部の政党別議席獲得数をプロットした図表11が示すように、イラク国民同盟の合計70議席（うち補償議席2議席）のなかで、サドル派が36議席（52.9%）を獲得した。反対に、ISCIは民兵のバドル組織の票を合わせても16議席（23.5%）しか獲得できなかった。サドル派が票を伸ばしたのは、①事前に予備選挙を実施して自派の出馬者を選定し、リスト形成の戦略を練り上げたこと、②食料や毛布などを配布し、インフラ整備や生活支援を継続することで、依然として貧困層に根強い支持を獲得したこと[25)]、の2点が要因である。

予備選挙では、サドル派メンバーと支持者のあいだで、県別に投票を実施、どの県でどの候補者がどの程度票を獲得できるかを入念にチェックした［*al-Ḥayāt* 3 Oct. 2009］[26)]。これによって、サドル派内部の票の分散を回避しただけではなく、サドル派支持者の票田を維持することに成功した。こうした予備選挙の結果は、サドル派から、地元の無名出馬者を多く当選させたことに端的に表れた。一例を挙げると、女性出馬者で全国最大得票数を獲得したマハー・ムハンマド（バグダード県出馬）、元コム（イラン）のサドル派支部長で、マイサーン県トップ当選のハーリド・ジャイヤーシーは、中央政府では無名の新人であった。こうして、予備選挙を通じて、サドル派は集票能力のある地元出馬者を適材適所に配置することに成功した。

そして、予備選挙での地元勢力の台頭を支えたのは、貧困層からの支持であった。イラク国民同盟が票を伸ばした南東部3県は、湿地帯が広がるイラクの最貧困地域であるが、図表10からもわかるように、サドル派の当選者が多い。ズィー・カール県では、副大統領のアーディル・マフディー（ISCI幹部）よりもサドル派幹部のビハーウ・アアラジーの得票数が多い。一方で、バグダードでもサドル派の当選が際立っているが、同県のサドル派の票田はサドルシティーやシュアラ地区などのスラム街である。こうして、サドル派の伸長によって、イラク国民同盟は票を回復することに成功したのである[27)]。

24）第2代目ISCI議長のアブドゥルアズィーズ・ハキームは、イラク国民同盟形成の発表のわずか2日後の2009年8月26日に、テヘランで癌のため死亡した。9月1日、シューラー評議会において全会一致で実子のアンマール・ハキームが第3代目ISCI議長に就任した。アンマールは、新生代のISCI議長として、国民的な同盟形成を主張した［*InPA* 1 Sep. 2009］。

25）サドル派が国内の地域コミュニティに根強い支持基盤を持っている点については、［Yamao 2009b］を参照のこと。

26）立候補者の資格・条件は、サドル派の支持者となって15年以上経過し、かつバアス党に加盟したことがない人物に限定された。投票所は、バグダードと南部県で実施され（各都市のサドル派事務所が出馬候補登録所）、サドル派メンバーと支持者のみが選挙権を持っていた。選出されたサドル派候補者は、イラク国民同盟の一部としてリストに名前を載せることになる［*al-Ḥayāt* 8 Oct. 2009］。

27）一方で、本来ISCIの票田であったシーア派聖地があるナジャフとカルバラーでは、サドル派、ISCIともに票を伸ばすことができず、マーリキー首相の法治国家同盟の独壇場となった。

【図表 10：イラク国民同盟内のサドル派の得票順位】

県名	番号	得票数	名前	所属
ディヤーラー	1	21,548	ハーディー・アーミリー	バドル
	3	14,461	フサイン・カーズィム	サドル
	10	8,964	バラースィム・ハミード	独立
バービル	4	26,887	アリー・シャーキル	n/d
	7	15,740	ジャワード・カーズィム	n/d
	3	13,215	アワード・ムフスィン・ラーディー	n/d
	1	12,461	ハスィーン・アリー	n/d
	*17	11,211	ムハンマド・アリー	n/d
ワースィト	1	25,316	カースィム・ムハンマド・アアラジー	n/d
	2	24,139	カーズィム・フサイン	n/d
	11	11,426	アブドゥルアミール	n/d
	15	9,181	イーマーン・ジャラール	n/d
カルバラー	1	18,562	ジャワード・カーズィム	サドル
	2	11,758	ハビーブ・ハムザ	ISCI
	*4	11,000	アティーヤ・アブドゥッリダー	バドル
ナジャフ	2	36,497	アブドゥルフサイン・ムハンマド	バドル
	1	17,575	ナッサール・ルバイイー	サドル
	15	16,794	フサイン・ジャースィム	サドル
	4	15,367	リカーウ・ジャアファル	サドル
	20	15,207	アブドゥルハーディム・フサイン	独立公正集団
マイサーン	9	18,431	ムシュリク・サルマーン	サドル
	3	17,657	ラーフィウ・フサイン	サドル
	14	15,423	ジャリーラ・ワルユーシュ	サドル
	5	13,318	ハサン・ラーディー	ヒズブッラー
	4	11,394	カリーム・ムハンマダーウィー	バドル
	1	11,147	ジャアファル・ムーサウィー	ファディーラ
ムサンナー	1	12,249	ハーリド・ジャイヤースィー	サドル
	4	11,150	ファーリフ・ウッカーブ	バドル
	*6	8,421	ズハイル・フワーディー	INC
バスラ	1	37,765	アリー・マフムード	サドル
	4	27,716	フラート・シャルア	ISCI
	7	20,912	アミール・フサイン	公正統一
	12	18,665	フサイン・マンスーリー	サドル
	9	13,552	アンマール・シャナーワ	ファディーラ
	*5	12,552	アフマド・ハッファージー	バドル
	21	8,609	ハイファーウ・アリー	サドル

県名	番号	得票数	名前	所属
バグダード	1	101,053	イブラーヒーム・ジャアファリー	改革潮流
	2	68,822	バヤーン・ジャブル	ISCI
	4	31,497	マハー・ムハンマド	サドル
	15	30,080	ハーキム・アッバース	サドル
	44	25,381	フサイン・アルワーン	サドル
	83	22,648	ムハンマド・ハッファージー	サドル
	26	22,264	アリー・ムフスィン	サドル
	3	20,436	アフマド・チャラビー	INC
	41	18,017	ムハンマド・サーヒブ	ファディーラ
	11	12,938	サバーフ・ジャルーブ	サドル
	69	12,802	リヤード・ガーニー	サドル
	35	11,918	アスマーウ・ティウマ	サドル
	21	11,240	アミール・ターヒル	サドル
	6	8,415	クサイ・アブドゥルワッハーブ	サドル
	*48	8,288	ハサン・ジャースィム	サドル
	*14	6,600	アクラム・ハキーム	ISCI
	*75	6,059	フサイン・アリー	サドル
県名	番号	得票数	名前	所属
カーディスィーヤ	4	28,360	ハミード・ムーサー	バドル
	1	17,032	ユースフ・ターイー	サドル
	10	10,574	イクバール・ハンムード	サドル
	6	8,083	ムハンマド・マシュクール	ISCI
	*5	7,418	イナード・アッブード	ファディーラ
ズィー・カール	2	42,833	ビハーウ・アアラジー	サドル
	1	30,473	アーディル・アブドゥルマフディー	ISCI
県名	番号	得票数	名前	所属
ズィー・カール	4	29,755	アズィーズ・カーズィム	バドル
	5	22,442	ハサン・ナスィーフ	ファディーラ
	8	17,949	アブドゥルフサイン	サドル
	15	9,862	リヤード・ザイディー	サドル
	23	8,350	ザイナブ・サフラーニー	サドル
	*3	7,624	ファーディル・カーズィム	改革潮流
	*7	5,602	サルマーン・アウダ	改革潮流

（注）選挙番号の＊は、女性枠で落選した出馬者を示す。
（出所）選管ホームページ、およびイラク国民同盟 HP（http://iraq316.net/）をもとに筆者作成。

【図表 11：イラク国民同盟内の県別議席獲得数】

	ISCI	バドル組織	サドル派	ファディーラ党	国民改革潮流	INC(チャラビー)	その他	合計
ニーナワー	1							1 (1.47)
ディヤーラー		1	1				1	3 (4.41)
バグダード	2		12	1	1	1		17 (25.00)
バービル	1		3				1	5 (7.35)
ワースィト			3				1	4 (5.88)
カルバラー	1	1	1					3 (4.41)
ナジャフ		1	3				1	5 (7.35)
カーディスィーヤ	1	1	2	1				5 (7.35)
マイサーン		1	3	1			1	6 (8.82)
ズィー・カール	1	1	4	1	2			9 (13.24)
ムサンナー		1	1			1		3 (4.41)
バスラ	1	1	3	1			1	7 (10.29)
合計	8 (11.76)	8 (11.76)	36 (52.94)	5 (7.35)	3 (4.41)	2 (2.94)	6 (8.82)	68 (100)

（出所）選管 HP、およびイラク国民同盟 HP（http://iraq316.net/）をもとに筆者作成（計算は筆者）。

2. 特徴――分極化する政党

以上で概観した主要政党の結果は、全体としては次の四つの特徴に整理できるだろう。

第1に、いずれの政党連合も単独で過半数（163議席）を取れず分極化したこと、にもかかわらず上位4政党連合の議席占有率が、実に約90%（325議席中293議席）に達したこと、である。第1党のイラーキーヤと第2党の法治国家同盟の獲得議席数の差がわずか2議席だったことに表れているように、いずれの政党も圧倒的な票を獲得できず、政党支持が分極化した。この背景には、どの政党を支持するかをめぐって、イラク人の意見が割れたという事実があった。これは選挙後の連立政権の形成に大きな影響を与えることとなる。

第2に、イラク戦争後初めて世俗主義勢力が躍進したことである。2005年1月の選挙以来、世俗主義勢力は支持を伸ばすことができず、イスラーム主義勢力が政権の中枢を掌握し続けていた。だが、今回の選挙では、世俗主義勢力が大きな躍進を見せることになった。この背景には、先述したように、マーリキー政権打倒のために、世俗主義を中心とする「野党」が結束したことがあった。

第3に、現職議員の再選率が極めて低いことである。サバーフ紙によると、現職議員275人のうち、当選したのが62人にとどまった［*al-Ṣabāḥ* 29 Mar. 2010］。これは、新政権の国会議員のうち、再選された議員の割合が、わずか19.1%にとどまった、ということを意味する。有力議員の落選は、バグダード県では、アリー・アッラーク（法治国家同盟）、ファーリフ・ファイヤード（イラク国民同盟、ジャアファリーの右腕）、ルバイイー元国家安全保障評議会議長（イラク国民同盟）、スライマーニーヤ県でフマーム・ハンムーディーISCI幹部[28]、ドホーク県でジャラールッディーン・サギールISCI幹部などである。一方で、現職閣僚の落選も相次いだ。一部を挙げると、ウバイディー国防省、アクラム・ハキーム国民対話担当国務（女性枠で落選）、ボラーニー内相（いずれもバグダード県）、アリー・バーバーン計画省（ニーナワー県）などである。反対に、既に論じたイラーキーヤやサドル派の勝因からも明らかなように、新たな地元勢力が票を伸ばす結果となった。当選した議員の71%が30～40歳代の若手議員だったことも［*al-Ḥayāt* 20 Apr. 2010］、新世代の政治家の台頭を証明している。政治不信と地方に根付いた新たな政治家の台頭という二つの要因が生み出した結果だと言えよう。

第4に、非拘束名簿制の導入で候補者に直接投票ができるようになった結果、女性議員の当選が極端に減少した点である。イラクには、2005年1月の選挙以来、「国会議員に占める女性の割合は4人に1人であること」（選挙法第3条3～4項）、つまり25%以上が女性議員であるべきという決まりがある。すなわち、325議席中少なくとも82人が女性議員でなければならないが、開票結果をみると、女性当選者はわずか21人であった[29]。その結果、女性枠繰り上げ当選という措置が取られた。女性枠繰り上げ当選となった女性議員は61人にも上った。言い換えるなら、女性議員全体の74.7%が繰り上げ当選となったのである。とくにその比率が高かったのが、ニーナワー県のイラーキーヤで、20人当選中7人が女性枠繰り上げ当選で、7,150票を獲得した男性候補者が落選し、わずか754票の女性候補者が女性枠で繰り上げ当選を果たした。また、クルド同盟の有力政治家フアード・マアスームが、イルビール県の女性枠で落選している[30]。このことが示しているのは、「女性の政治参加が民主化のカギ」と考える米国の意向をうけて作られた女性議員25%ルールは、イ

28）しかし、イラク国民同盟は、補償議席枠をハンムーディーに充て、繰り上げ当選させることを発表した［*RN* 18 Apr. 2010］。

29）女性枠の当落の数字、割合については、選管のホームページからすべて筆者が計算した。

30）ただし、クルド同盟は後に、補償議席枠を使ってフアード・マアスームを繰り上げ当選させることを発表した［*SA* 9 Apr. 2010］。

ラクの現状と明らかに適合しないばかりか、民意に真っ向から反している、という点である。これは、新制度の導入で明らかになった。

以上に整理した四つの特徴のなかでも、過半数獲得政党連合の欠如と分極化が、選挙後の新政権の形成に最も大きな影響を与えることになる。その結果、イラクは必然的に次の二つの問題に直面することになった。第1に、連立政権の形成が必要となることである。各政党連合は、大勢が明らかになった直後から、過半数獲得のための連合交渉を開始した。ここに、選挙前の政党連合の再編が再び発生することになる。第2に、首班指名をめぐる対立である。首班指名には国会議員の3分の2の賛成（217議席）が必要となる。この問題は、分極化した状況のなかで、過半数確保よりも困難な課題となり、首班指名にともなう多数派工作は、後の組閣にも大きな影響を与えるだろう。

IV. おわりに

こうしてイラク政治の分極化を引き起こした選挙戦は幕を閉じた。では今回の選挙はいかなる意味を持っていたのだろうか。論点は大きく三つあるだろう。

第1に、今回の選挙を左右したのは、「インティファーダ」以降のマーリキー首相の強いリーダーシップに対する反感であった、という点である。冒頭で指摘したように、2009年地方選挙以降、マーリキー首相は強力なリーダーシップを発揮し始めた。それに加え、マーリキー政権は、2008年3月の「騎士の襲撃」作戦でサドル派民兵マフディー軍を弾圧したことでサドル派との対立を深め、2009年後半のバグダードの大規模テロ事件（8月19日、10月25日、12月8日）では、シリア・イランなどの近隣諸国との関係を悪化させた。こうしたマーリキー政権の政策が、「与党」の分裂に起因する票の分散と、マーリキー首相に反発する世俗派勢力の「野党」の結束に起因する票割れの回避に帰結した。とりわけ「野党」は、マーリキー政権打倒の機運の盛り上がりのなかで結束し、票を伸ばした。いわば、マーリキー首相は、政権後半で獲得した強力なリーダーシップの「つけ」を、今回の選挙で払わされたのである。それが選挙前の政党連合の再編に影響を与え、それゆえに選挙結果を大きく左右した。

第2に、今回の選挙は、国民和解の具体的な方法をめぐる対立であった。国民和解とはすなわち、バアス党政権の遺産を清算し、旧バアス党員をどの程度新たな国民統合に組み込むかという問題である。ナショナリズムに基づく国民統合が重要であることは、2009年地方選挙で明らかになったが、今回の選挙では、その国民統合の具体的な境界線をどこで引くか、という問題をめぐって対立が生じた。地方選挙以来曖昧なままの国民統合をめぐって、旧バアス党員をも含む広範な国民統合を目指すアッラーウィー型国民和解と、旧バアス党員を完全に排除したマーリキー型国民和解が、競合したのである。

第3に、上記の二つの論点に対するイラク人の民意が分かれ、政治が分極化した、という点である。言い換えるなら、マーリキー首相の強力なリーダーシップと強い指導者像を支持するか否か、マーリキー型国民和解かアッラーウィー型国民和解のどちらを選択するか、という問題に対してイラク人は様々な意見を持っており、それが激しく拮抗している、ということである。票の分散は、民意が選挙結果に明示的に反映されたという点で、極めて高く評価できる反面、その帰結としての政治の分極化は、短期的には政局の混乱と不安定化をもたらすことになる。

以上で論じてきたことは、次のように整理できるだろう。すなわち、今回の国会選挙は、①マー

リキー政権後半の強いリーダーシップに反対する勢力の「カウンター・インティファーダ」であり、②旧バアス党排除のマーリキー型国民和解か、旧バアス党包含のアッラーウィー型国民和解かという国民統合の具体的な方法を問う選挙であり、その結果、③以上の 2 点に対する評価が完全に分かれ、その結果政治が分極化した、と結論することができる。言い換えるなら、2009 年地方選挙以来、強力なリーダーシップのもとで曖昧にしてきたナショナリズムと国民統合の中身をめぐって、政治が分極化したのである。

だが、分極化した政治は、次なる政治ゲームの開始に直結する。すでに、開票直後から新政権の形成に向けた政党連合の再編と連立政権の交渉が激化している。ここで問題になるのが、こうした選挙後の政治ゲームが、選挙で反映された民意とは無関係なレベルで進展していくことである。政治エリート間の国家のパイの争奪が激化することで、政治ゲームと選挙で表明された民意がかけ離れていくと、それは政治と社会の乖離につながる。政治と社会の乖離は、国民の政治不信に直結し、治安の悪化、ひいては政治的不安定に帰結することになるだろう。

いずれにしても、政治が分極化してしまった以上、今後形成される新政権が脆弱になることだけは間違いない。過半数を占める政党連合がなくなるということは、強力なリーダーシップを持つ強い指導者を中心とした政権運営ではなく、諸政策の調整型の脆弱な政権にならざるを得ない。新政権の正当性も危うくなる。こうして、「マーリキー・インティファーダ」と形容された強い中央集権的な政府は、終焉を迎えることとなったのである。

（2010 年 5 月 10 日脱稿。本稿で扱った選挙以降の組閣までの状況については、拙稿、2010「多数派形成ゲームとしてのイラク選挙後危機――2010 年 3 月国会選挙後の権力分有をめぐる合従連衡――」『中東研究』(510), pp. 76-91. を参照のこと。）

＜引用文献リスト＞

1. 外国語

ICG: International Crisis Group. 2010. *Iraq's Uncertain Future: Elections and Beyond* (Middle East Report No.94).

Yamao, Dai. 2008. "Transformation of the Islamic Da'wa Party in Iraq: from the Revolutionary Period to the Diaspora Era," *Asian and African Area Studies* 7(2), pp. 238–267.

———. 2009a. *Transformation of the Iraqi Islamist Parties and their Framing in the Changing Regional and International Political Environments*. Kyoto Working Papers on Area Studies No. 16 (GCOE Series 14).

———. 2009b. "An Islamist Social Movement under the Authoritarian Regime in Iraq during 1990s: A Study on the Shi'ite Leadership of Ṣādiq al-Ṣadr and its Socio-political Base," *AJAMES* 25(1), pp. 1–29.

———. 2010. "Islamism or Nationalism?: Struggle for a New Iraqi State-building," Distributed Paper at *Future of Iraq: Social, Economic and Political Issues in Question* (Crown Plaza Hotel, Beirut, Lebanon, 16–17 January).

2. 日本語

酒井啓子 2005「イラク移行政権と国民議会構成にみる戦後イラクの政治勢力」『アジ研ワールド・トレンド』118, pp. 33–40.

山尾大 2007「戦後イラクの政治変動とシーア派最高権威の国民統合論――スィースターニーのファ

トワーから――」『イスラーム世界研究』1(2), pp. 210–269.
――― 2009「イラク・ナショナリズムが勝利した日――2009 年 1 月 31 日イラク地方県議会選挙の分析――」『イスラーム世界研究』2(2), pp. 152–175.
――― 2010a「政党の合従連衡がもたらす宗派対立の回避――戦後イラクの政党政治と権力闘争（2003 年～ 2008 年 8 月）――」佐藤章（編）『新興民主主義国における政党の動態と変容』アジア経済研究所 , pp. 101–132.
――― 2010b「イラク覚醒評議会と国家形成――紛争が生み出した部族の非公的治安機関をめぐる問題――」佐藤章編『アフリカ・中東における紛争と国家形成』（調査研究報告書）アジア経済研究所 , pp. 19–48.

3. 定期刊行物

al-'Adāla（The Organ of the ISCI, Web 版　http://www.aladalanews.net/home/）
al-Ḥayāt（Web 版　http://www.daralhayat.com/）
INA: *Wikāla Anbā' al-I'lām al-'Irāqī*（Web 版　http://al-iraqnews.net/new/）
IPA: *Iraqi Press Agency*（Web 版　http://www.iraqpa.net/）
InPA: *Independent Press Agency*（*Wikāla al-Ṣaḥāfa al-Mustaqilla*）（Web 版 http://www.ipairaq.com/）
ISCI: *al-Majlis al-A'lā li-l-Thawra al-Islāmīya fī al-'Irāq*（The Organ of the ISCI, Web 版 http://almejlis.org/news）
al-Milaff（Web 版　http://www.almalafpress.net/）
MN: *Mawsū'a al-Nahrayn*（Web 版　http://www.nahrain.com/）
Nūn（Web 版　http://non14.net/）
RD: *Rādiyū Dijla*（http://www.radiodijla.com/）
RN: *Rādiyū Nawā*（http://radionawa.com/ar/）
S: *al-Sūmālīya*（Web 版　http://www.alsumaria.tv/en/home.html）
SA: *al-Sharq al-Awsaṭ*（Web 版 http://www.asharqalawsat.com/）
al-Ṣabāḥ（Web 版　http://www.alsabaah.com/）
al-Wasaṭ（Web 版　http://wasatonline.com/）
al-Zamān（Web 版　http://www.azzaman.com/）